

## 社会倫理研究所歴代所長インタビュー

小林 傳 司

(第六代所長)

日時 二〇一一年八月四日

場所 大阪大学コミュニケーション・センター小林研究室  
インタビュー 奥田太郎

奥田・小林先生は、二〇〇一年四月から第二種研究所員として社会倫理研究所（以下、社倫研）に関わっておられます。翌年二〇〇二年四月から二〇〇五年三月までの三年間、所長をお務めになりました。社倫研の設立目的や経緯で考えますと、経済倫理研究所として始まり、そこに法学が入って社会倫理研究所となったわけですから、経済、経営、法が主たる専門領域ということになると思います。そのいずれにも属していない小林先生が所長になることは異例だったと思うのですが、そのあたりの経緯をお話いただければと思います。記録を見ますと、小林先生の所長就任とともに、第二種研究所員や非常勤研究員の顔ぶれが大きく変わったように見受けられます。

小林・私が一九九三年から一九九四年までイギリスにいて、日本に

帰ってきたのが一九九四年の秋で、一九九五年から一九九七年まで学長補佐をやっていました。その頃に大学全体のことを見るようになって、聖霊キャンパス（現在の瀬戸キャンパス）に新しい学部をつくるためのコンセプト作りなどを全部やったり、大学の本部でやっている会議の裏方をやったりしていました。その頃、私はまだ助教授だったのですが、学部長や評議員の出る会議の段取りを全部考えて、資料を作る仕事をしていました。そのことを通じて、大学全体のヒューマンリソース、つまり、誰がどんなことをやっていて、どの人が優れているか、といったことの見当がつくようになってきたわけです。助教授の頃はまだ分野が違えば違うほど教授は偉いのではないかと思っていたりするものですが、そういう感覚がなくなつて、端的にこの人はこういうことをやっているんだ、と普通にフラットに見られる感覚をもっていた時期です。それが一九九五年から一九九七年。それから、しばらく研究から離れていたののでリハビリを始めて、コンセンサス会議など、いろいろとあちこち

出て行っていました。二〇〇一年に第二種研究所員になる前に、社倫研で仕事をしていますよね？

奥田…一九九八年に「大学教育の倫理」シンポジウムで報告なさっていますね。

小林…そのあたりから、研究会等で発表してほしいという依頼を受けるようになっていました。誰が目を付けてくれたのかは今となっては定かではありませんが、一つは、私が学長補佐をやっていた時の副学長が澤木さんで、経済学部の中矢さんともよく話をしていて、というコネクションがあつたかもしれせん。また、あの当時は、もう少しカトリックネットワークを意識して社倫研は動いていたので、小学校から高校までカトリック系の学校に通っていた私は、カトリックネットワークの人々から見て、かなり近いものをもっていると考えられていたのではないかと思います。また、澤木さんの後に副学長を務めることになった丸山さん（現在の社倫研所長）が、大学全体の見地から社倫研を眺めたときに、やや旧態依然としているように見えたのでしよう。ディシプリン・オリエンテッドなスタイルをとっていることや、大変古いカトリックネットワークを中心としていて、アカデミックかもしれないけれども現代的な問題に取り組み上で、ちよつと時代からずれているのではないかという感じは否めなかつたわけです。懇話会や研究会での議論のスタイルを見ても、九〇年代後半から二〇〇〇年という時代にあつて、現代的な感覚に少し鈍感であるとは思っていました。

そうした中で、科学技術は現代社会の倫理を考える上で重要だからということ、私にお声がかかり、そうした話をしたりもした。当初は、社倫研の人たちからは、私は理学部出身だし、どちらかという文武系ではなく理系の人である、とどこかで思われていたようです。ですから、「私は科学のことはよくわからないのだけれども」とよく言われました。しかし、私の話は、扱っている素材は科学ですが、議論の構造や枠組みは文系的なものなので、徐々に仲間として受け入れられていったのだと思います。そうして、少し外にいたけれども中に入れてもらった人間から見ると、当時の社倫研のアプローチは少し堅く感じていました。当時の丸山副学長も、カトリック大学としての南山大学にとつて、社倫研のような組織は重要なリソースであるという認識があつたようで、他のところでできないことができるとは思わないのに、その点で少し脆弱になつているので、これを立て直す意味で、新しいアプローチをやつた方がいい、と考えていたようです。学内を見渡して、そういうことにチャレンジしてくれそうな人間があまり見当たらないので、私に白羽の矢が立ったということなのでしょう。当時の状況としては、法学系のスタッフと経済学系のスタッフとが何となくお互いに研究所を自分たちのテリトリードと思つていても、社倫研みたいなコンセプトを支えようと考える人材は若手も含めて少なくなつていた。それは、たとえば、経済学系ではディシプリン・オリエンテッドな若手が増えていて、社会倫理のような話に対して膨

らみをもつてやれる人間があまりいなかった。法学系ではやはり実定法の研究者が多くて、社倫研となると結局、法哲学者になつてしまう。だから、適切な人がいない、と。そこで、どちらとも話をしてきた人間で、敵がいなかった、ということ、私が選ばれたのでしょうか。他にも、村上陽一郎さんをシンポジウムなどに招く時の窓口にもなつたりしていましたしね。それから、土田友章さんも私をわりと評価してくれました。それまでの社倫研の路線を少し変えるときに私が所長になることに關して、誰も反対しない、という状況になつていた、というのが大きかったのだと思います。

奥田…二〇〇一年という、小林先生が科学技術社会論（STS）学会を立ち上げた時期ですね。

小林…その頃は、私自身も、学科を窮屈に感じ始めていましたし、せつかくやるなら、もつと広いところでいろいろやつた方が面白いなと思つていた時期ですね。当時の副学長の丸山さんから、長期的に關わつて立て直してほしいと言われていたので、少なくとも、いろいろな応用倫理系のものをもう少し取り込まないといけないと考えました。もちろん、それは社会倫理ではない、という声もありました。社会倫理はキリスト教的 worldview と結び付いている教説なので、もつと知的に研究すべきだな、とその当時も思つていましたが、日本社会でそのままダイレクトにお説教を垂れて社会倫理をと言つても無理だろうと思つていました。すると、日本社会の中でああいう精神がどのよう

に生きるか、という問題の立て方をするべきなのですが、そういう感覚が希薄でした。カトリックの視点から見れば、キリスト教の社会倫理が本物であり、それをどうやって日本の社会に普及させるか、という問題の立て方をするわけですが、そのアプローチにはやはり限界があるだろうと思つていました。当時フォローしかかつていて、もう少しきちんとやりたかつたな、と思うのは、コミュニケーションのようなテーマですね。当時、まずは、法律と生命倫理といったところからアプローチしていました。中京大にいた宇佐美誠さん（現在、東工大）にも、社倫研の研究会やシンポジウムで話をしてもらつていました。これまでの社倫研の路線を考えて、そこから継続的に取り組みやすい入口を考えると、そこかな、と思つたのです。例えば、そのようにして、あの人であればこの入口で、あの人であればあの入口で、といった形で取り仕切ることのできる人が非常に少なかったのだと思います。

奥田…今でも少ないですよ。

小林…今でも少ないし、日本全体で少ない。私の、浅いけれども広い、というのが活きたような気もするのだけど（笑）見渡すと、専門性に強くコミットして、「この道一筋何十年」が好きな人が多いですよ。

奥田…それも大切だとは思いますがね。いずれにせよ、小林所長の方針としては、それ以前の社倫研の路線も継承しつつ、新しい方向性を示すということだったのです。

小林…そうですね。その他に、南山大学内部の雰囲気というものは

社倫研の路線変更の背景要因としてはあつたように思います。伝統的にとられてきたカトリックネットワークで動かしていくやり方に対する反発というのも大学の中で始めていて、カトリックの本流の人たちもそのことはよくわかっていました。その中で、私は、その人たちから見ても毒ではない、どちらから見ても、よいのではないかと思われる人間の一人であつたような感じがします。ですから、仮に、私が自分の専門である科学技術論に特化したようなやり方で運営していたら、もつと反発があつたのではないかと思えます。私物化しているではないか、と思われたかもしれません。そういうことも考えて、自分の専門に近いところはあえて避けて運営していたつもりです。そうしたら、自分が勉強する機会にもなるだろうと思つて(笑)

奥田…確かに(笑)

小林…でも、やっぱり難しかったですね。今の社倫研の方が、国際政治や平和、正戦論といった領域で、第二種研究所員の人たちが積極的に関わってくれているように見えますね。たとえば、総合政策学部の山田哲也さんは、がんばつて支えてくれてますよね。かえつて人文学部の方はどうですか？

奥田…脳科学関連で、人文学部の鈴木貴之さんが企画を立てて主導するなど、積極的に関わってくれています。

小林…私が在任中は、人文学部の方々は一応名前には連ねてくれているのだけど、何か企画を作ってくれるということもなかったし、

そのへんは苦しかったですね。

奥田…そういう意味では、小林所長時代にやろうとしていた体制は、それなりに、無理のない規模で回り始めてはいます。第一種研究所員のシーゲルさんが馬力のある方なので、彼の出すアイデアを中心に、国際政治系の話題に力を入れていたという傾向はありますが。

小林…単純に肯定的に考えてよいかは微妙なのですが、学問全体のトレンドとして、ポリシー・オリエンテッドになってきている感じがします。これは、人文社会系に明らかで、理工系にも少し見られているものです。ですから、何かプロジェクトを組むときに、その出口のところで政策提言などをつくる方向で進められているものが増えていると思います。もちろん、そうした政策誘導がかかっていることもあります。翻つて見ると、それは、ある意味で、社会倫理と相性はいいはずですよ。たとえば、鈴木さんの脳科学のプロジェクトにしても、脳科学の認識論的なところだけで閉じていたら、研究費は絶対に下りなかつたと思います。その出口として、教科書にして社会に向けて発信するといった、そういった広い意味でのポリシー・オリエンテッドな側面をもっていることが重要になっています。純認識論的な研究プロジェクトというのは、だんだん減ってきているのではないですか？ 私は、そういう方向にわりと早めにシフトした人間だったので、何となくみんながそういう方向に来ているのを見ると、逆に「こんなんで本当にいいの？」と思つたりし

ますね。

奥田…加藤尚武先生が生命倫理学をやりだしたときと、普及後の様子の対比を連想させますね。

小林…そういうポリシー・オリエンテッドな方向性というのは、実は、九〇年代にすでに底流にあつたと思います。たとえば、鷺田清一さんが臨床哲学を本格的に始めたのは、一九九五年の阪神淡路大震災がきっかけだったと聞いています。その中で、ボランティアが動いたりして、関西では、これまでの社会のあり方でよかつたのかとか、今まで見えていなかった問題が見えたとか、人のネットワークの動き方が変わったとか、そういった状況の中で、哲学に何ができるか、と問われたりしていた。臨床哲学の初期の頃は、そういったことばかり議論していたと聞いています。それについては、『ドキュメント臨床哲学』という本が最近出ています。あの時期に、鷺田さんがそういうことに反応してしまつていたように、私も、昔だつたら絶対にやらなかつたようなコンセンサス会議をやっているわけですよね。そのための研究費なんか全然もらえなかつたわけですけど。私にしても鷺田さんにしても、社会とのフッキングをどう作るか、ということが気になり始めていたのでしょうか。だから、社倫研の所長も引き受けたのかもしれませんが。だとすると、三・一一是もつと大きいかもしれない。これからまた、かなり大きく変わっていくかもしれないし、いろんな領域の人がそういったことを発言していますよね。もちろん、違う動きもいっぱいある

のですが。たとえば、政治学者の藤原帰一さんが朝日新聞で次のようなことをはつきり書いていました。政治学者として自分は原子力の問題にずっと目を閉ざしてきた、と。そして、反対を言っている人々が周縁に追いやられて変な人だという扱いをされているのを見て見ぬふりをしてきた。これはサイレント・コンスピラシー（暗黙の共謀）として自分も荷担していたのだ、ということを書いているわけです。やっぱり、ちよつとびつくりしました。彼は私と同じ世代なのですが、彼は政治学者としてこれまであんな生な言葉遣いをしない人だと思つていましたからね。また、今だと宗教学者の島園進さんもそうですね。彼は、厚生労働省の審議会で、ヒトクローンの問題で最後まで抵抗した委員です。また、哲学者の野家啓一さんも、いたるところで、「トランス・サイエンス」と言っている。そういう問題群に触れずに哲学はもう成り立たないのではないかと、という意識が、野家さんにも明らかに出ています。ですから、九〇年代から全体的にあつたポリシー・オリエンテッドな方向性の流れがあり、また、阪神淡路大震災や三・一一のような出来事によつて、自分の足下を掘り崩されたという意識をもった人が増えているような気がしますね。

奥田…三・一一を経験した後では、もはやポリシー・オリエンテッドだけでもだめだ、ということでもあるかもしれませんね。少し話題を変えますが、社倫研は、名古屋というローカルエリアの私立大学にあつて、なおかつ、その中でも力のない小さな

研究所です。でも、専任の研究所員がいて、やろうとすれば何かやれそうな環境です。しかし、オーディエンスを全国規模にとつて情報発信しても、基本的には名古屋の人しか来てくれない。そういうある種の制約の中で活動せざるをえないわけですが、社倫研が果たせる役割としてどのような可能性があると思われませんか？

小林…それはね、ずっと悩んでいた問題ですよ。

奥田…どうい道があるのかなあといつも考えているのですが。規模と地域に応じて、やれること、やれないことははっきりしていると思うのです。

小林…最近の社倫研のチラシを見てみると、精力的に活動しているなと思いますし、昔よりずっと魅力的な企画になっているなとも思いますよ。でもやっぱり、来る人は周りの人だけですか？

奥田…基本的にはそうですね。時折、エリア外からはるばる来てくれたりもしますが。たとえば、大阪大学 C S C D がやっているようなイベントを同じように社倫研でやったとしても、

二〇〇人も集められないのではないかと、思います。

小林…顔ぶれ次第ということもあるでしょうけど。

奥田…そうなのですが、有名な人を外から呼んで人を集めるというのは、あまりやりたくない、と思つてるところがあります。

小林…まあ、それはやりようではないか、といった安易なことを言うつもりはないですけど。

奥田…やりよう次第という部分も否めませんけど。

小林…でも、やっぱり、南山でなければできないことをどうするかでことですよ。旧帝大と同じことをやったら絶対ダメでしょう。本当はもつと、カトリックに振るべきなのかもしれない。

補完性の原理とか、社会的包摂とか、そういう問題は、やはりカトリックがやるべきだと思います。最近、イタリアで大ロングランになったコメディ映画『人生、ここにあり！』を観たのですが、イタリアでは、バザール法というのが一九八〇年代にできて、精神病の患者を十四日以上入院させないということになつている。十四日ですよ。それ以降は全員社会復帰させるということです。しかし、実態としては、精神病の患者は、医師から薬を処方されながら、協同組合のような作業所で切手貼りのようなつまらない作業をしている、という構造の中で生きています。その映画は、ミラノが舞台で、組合運動で浮いてしまつたちよつと過激な左翼の男が、人事異動でその作業所のマネージャーとしてやつてくる、というところから始まります。そこから、「もつと本当の仕事をしようぜ」といったよくあるタイプの議論が出てきて、作業所の連中が本当の仕事をし始める、という話です。でも、そこでハッピーエンドに終わらない現実もぎつちり描かれていて、非常にコンパクトに感動を誘うようできた作品です。この作品は、労働組合で過激な左翼が、「君、労働するということは、人間性を取り戻すことであつて」といったことを言い出す、左翼の物語として見ることもできます。しかし、他方で、この作品で描かれたような状況を成り立たせる

ような、社会的包摂のような感覚を読み取ることもできる。だから、単純に左翼組合主義と考えるのはよくなくて、ああいつた左翼組合主義を動かしている別の何か、たとえば、カトリックの補完性の原理とか、そういったものがあるのではないかな、という気がしています。これは、日本とはずいぶん違うので、では、日本にはそれに当たるようなものとして何かあるのだろうか、と考え込んでしまっています。そのあたりをきちんと研究していくのも、今後社倫研がとりうる方向性の一つなのかもしれないですね。